

帝国日本の気象観測ネットワークⅡ

—陸軍気象部—

山本晴彦 著，農林統計出版 発行，
2015年9月30日，531 pp. 定価5,250円＋税

本書は『帝国日本の気象観測ネットワーク—満州・関東州—』に続くものである。内容が多岐にわたり，特異な項目が多くあるが，目次に記載されている項目が内容を的確に示すと思われるので，まず目次を詳しく示す。

まえがき

序章 課題と方法

第1章 陸軍気象部や気象部隊に関する気象資料の所蔵と公開

1 気象庁図書館，2 防衛省防衛研究所 戦史研究センター資料閲覧室，3 アジア歴史資料センター「アジア歴史資料デジタルアーカイブ」，4 アメリカ議会図書館，5 中国気象局気象档案馆，6 奈良県立図書情報館「戦争体験文庫」，参考文献

第2章 中央気象台の創設・拡充と外地における気象業務の展開

1 中央気象台の創設と拡充，2 外地における気象業務の展開 [台湾における気象業務の展開，日露戦争による臨時観測所の開設，朝鮮における気象業務の展開，樺太における気象業務の展開，南洋群島における気象業務の展開]，参考文献

第3章 気球隊の設立と臨時軍用気球研究会の活動

1 気球の軍用利用，2 日露戦争における臨時気球隊の設立と活躍，3 第一・第二臨時気球隊の改編，4 気球班・気球隊への改編，5 臨時軍用気球研究会の設立，6 臨時軍用気球研究会の活動，参考文献

第4章 陸軍気象勤務要員の養成と陸軍砲工学校気象部の設立

1 陸軍気象会の発足と飛行学校における気象教育，2 陸軍気象勤務要員の養成，3 第一回気象総合演習(特殊演習)の実施，4 陸軍砲工学校気象部の設立，5 陸軍砲工学校気象部への学生派遣，6 気象観測器材の移管，7 陸軍砲工学校における気象業務の廃止，参考文献

第5章 陸軍気象部の創設と拡充

1 陸軍気象部の創設と変遷，2 組織と人員構成，3 歴代の部長，4 終戦時の人員構成，5 建物と配置，参考文献

第6章 陸軍気象部の人材養成

1 陸軍気象部の諸規定，2 陸軍気象部における学生教育 [昭和15年度の教育課程，昭和14年度甲種幹部候補生の修業成績，気象技術員(気象技術要員)の養成]，3 戦中期における気象教育の転換，4 気象部・気象隊・野戦気象隊への要員派遣 [気象技術員(気象技術要員)の配慮，甲種・乙種の学生・幹部候補生の派遣，気象器材修理要員の派遣]，参考文献

第7章 陸軍気象部の気象観測所・飛行班

1 気象観測所の開設，2 支部と気象観測所・出張所，3 平壤・大邱気象観測所の新設，4 陸軍気象部と気象観測所における支出，5 気象観測器材と気象要員の要求，6 飛行班の設立と展開，参考文献

第8章 陸軍気象部の調査研究

1 第一課 [兵要気象に関する研究調査，気象器材の研究・

<http://www.agrmet.jp/sk/2015/C-2.pdf>

2016年1月5日 掲載

Copyright 2015, The Society of Agricultural Meteorology of Japan

考案・設計・試作・試験]，2 第二課 [気象研究演習，研究試験報告および研究試験規定，気象勤務，気象隊による観測露場の開設と気象観測の実施]，参考文献

第9章 気象報の暗号化と外国気象報の暗号解読

1 軍機保護法とその改正，2 気象管制の実施に向けた気象報の暗号化，3 外国気象報の暗号解読，参考文献

第10章 陸軍気象部等で発行された気象資料・気象学教程

1 気象資料の探索 [極秘『大東亜航空路気象誌』の参照資料，極秘『北東方面作戦気象資料(二案)』の参考文献，軍用秘密『航空関係南方気象参考資料』の参考資料]，2 気象資料 [陸軍砲工学校気象部，陸軍気象部，陸軍航空本部(陸軍士官学校・陸軍航空技術学校)，陸軍科学研究所，大本営陸軍部，北支那方面軍(北支派遣軍)多田部隊，北支那気象部，第二十二野戦気象隊]，3 気象学教程等 [気象学教程等の概要，『気象学教程』(昭和十三年度乙種学生用第一巻仮版)，『軍用気象学教程』(砲兵気象乙種学生用)，⑧『瓦斯気象教程』(昭和十六年度)，『無線高層気象観測法の参考』(昭和十六年六月)，⑨『気象観測教程』(昭和十九年度改訂全将校学生用)，『陸軍気象常用諸表』(昭和十四年五月)・『陸軍気象常用諸表』(昭和十六年五月)・『陸軍気象常用表』(昭和十八年九月，改訂第二版)]，参考文献

第11章 気象部・気象隊の編成と展開

1 気象部・気象隊の編成概要，2 支那における野戦気象隊の編成と展開，3 支那における北支那方面軍の編成と展開，4 北支那における気象部隊の編成と展開 [北支那気象部の編成と展開，北支那における測候所の編成と展開，北支那気象隊の編成と展開]，5 中支那における気象部隊の編成と展開，6 南支那における気象部隊の編成と展開，7 南方における野戦気象隊の再編と展開(第二十五野戦気象隊，第二十二野戦気象隊)，8 気象隊の随行品，9 気象部や気象隊の部隊史に関する資料，参考文献

第12章 企画院気象協議会の設立と戦時下における中央気象台の気象業務

1 陸軍による気象通報の制限，2 陸軍における気象情報の一元化，3 企画院気象協議会の設立による気象業務の一元化，4 戦時下における中央気象台の気象業務，参考文献

第13章 終戦と戦後処理

1 連合軍司令部に提出した陸軍気象部の回答書類，2 終戦時の陸軍気象部 [終戦時における陸軍気象機関の構成，終戦時における陸軍気象機関の編成と人員推定]，3 気象施設における器材および消耗品の現況，4 陸軍気象部回答(e)に記された「各器材に関する製作所の特質」，5 「(f)各種器材研究の経過及研究完結の目途」について，6 「(r)気象資料及局地予報研究」について，7 「(s)～(z)」について，8 「(y)気象観測の種類及其の説明」について，9 「(z)「ラヂオゾンデ」，測雲「ゾンデ」，方向探知機，地上観測，測風観測及空電観測の実施要領」について，参考文献

終章

1 陸軍気象部・気象隊に所属した主要将校の回想録，2 能

登久少将の回想, 3 中村克巳大尉の回想, 4 戦友会について, 参考文献

おわりに

附図 1, 2, 附表 1~4, 人名索引, 事項索引

各章を見ると, 1 章では各機関を対象に所蔵状況の紹介とアジア歴史資料センターでの検索時の課題等に言及している。2 章では中央気象台の創設と拡充の過程の紹介, 外地における気象業務の展開を紹介している。3 章では日露戦争時の臨時気象隊の設立等について紹介し, 飛行機へと需要が移る大正末期の気球の軍事利用および気球の昇降や運航時の気象観測と器材にも言及している。4 章では軍用気象学・軍用気象会の発足から気象要員の養成を経て砲工学校気象部の設立の経緯と各連隊・学校からの学生派遣状況を記している。5 章は砲工学校気象部を基に創設された陸軍気象部の組織・人員構成, 歴代部長, 終戦時の人員構成, 当時の建物・配置等, 残置資料等を紹介している。6 章は気象部の諸規定を記し当時の教育課程・修業成績等も交えて紹介しており, 気象部隊で養成された要員, 気象器材気象技術員・器材修理員の派遣状況を記している。7 章では陸軍気象観測所の開設状況, 新設場所の予算, 気象観測所からの気象観測器材と要員の要求内容, 気象班の設立と展開を記している。8 章では第一・二課の業務を紹介し, 気象露場の開設と気象観測の開始の具体的順序を記している。9 章では軍機保護法・改正を記し気象管制の実施に向けた気象報の暗号化と外国気象報の暗号解読方法を記している。10 章では陸軍気象部・航空部等の気象関連機関, 関東軍, 戦地展開気象部隊等からの発行気象資料, 気象学教程等を紹介している。11 章では気象部隊の編成概要, 北支那方面軍・気象部隊の編成と展開, 気象月報等, 南方の野戦気象隊の再編と展開を紹介および気象部隊史資料を紹介している。12 章では戦時下の気象通報の制限, 陸軍気象情報や気象協議会の気象業務の一元化を記し, 中央気象台の気象業務を紹介している。13 章では陸軍気象部が連合軍司令部 (GHQ) の指示により気象部の構成・人員, 気象観測器機の特徴, 研究開発, 気象資料の作成・局地予報研究状況, 天気図の分析・気象観測の現状を回答書類として作製提出した資料を紹介している。特にラヂオゾンデ, 測雲ゾンデ, 方向探知機, 地上・測風・空電観測の実施要領は詳細な資料作成・提出が求められていた。終章では陸軍気象部の運営・教育, 派遣気象部隊・気象隊で将校として勤務した 3 代部長や主要将校についての回想録等を記している。最後に陸軍気象史の付録と終戦時の陸軍関係機関の組織図等を転載している。

なお, 「おわりに」の記述中に, 著者および書評執筆者関連における農業気象関係者について, 『陸軍気象史』の付録にある第 8 期甲種幹部候補生の坪井八十二氏(農林水産省農業試験場での四国・東北場長経験者)や九州大学農学部農業気象学研究室関係で鈴木清太郎・武田京一・坂上務(元)教授に関する記述もある。ただし, 「おわりに」に記述した文献に一部ミス(鈴木清太郎先生の御逝去, 「天気」24(5), 1977)や目次の番号付与違いが見られる。

以上のように, 著者は帝国日本の気象観測ネットワークー満州・関東州ーに引き続いての帝国日本の気象観測ネットワークⅡー陸軍気象部ーの出版においては, 貴重な情報・資料の提供・紹介を行っている。著者の並々ならない努力と時間の投入によって成し遂げた業績, すなわちほとんど見られることのない資料の紹介・解説によって, 日の目を見たことは大変有益であると思われる。是非とも有効利用されることを願っている。

(九州大学名誉教授 真木太一)